

『南山神学』43号(2020年3月) pp.153-187.

教会音楽を通した福音告知の一提案

—待降節・降誕節における会衆の行動的参加型集会の実践経験
より—

吉田 文

はじめに

2008年より筆者はカトリック南山教会に於いて「クリスマスのおはなし」と題した、聖書朗読と音楽を組み合わせた形式の集いを提案・実践している。

2008年当初は名古屋聖霊短期大学学生の音楽関連授業成果発表も兼ねて、学生が実際に教会の現場で聖書を聴きながら典礼音楽を演奏することにより、典礼と音楽の密接な関係を経験しながら学ぶことも意図の一つとしていた。また、キリスト教信者ではない参加者にとっても日本では表面的なイベントとなりがちなクリスマスの本来の意味と、バックグラウンドミュージックとして雰囲気を楽しむだけとなりがちなクリスマスキャロルの内容を、実際に教会での歌唱行為を通して行動的に参加しながら認識できるようになること、そして聖書の題材にインスピレーションを得た作品や聖歌をモチーフとして作曲されたパイプオルガン作品の内容理解の手助けとなることを目的とした。

「クリスマスのおはなし」では、参加者にアンケートを配布回収することはしておらず、聴衆としての参加者からのデータは今回提示することができないが、毎回非常に高い評価と満足度を確実に得ていると感じる。参加者数は年により幅があるが、150人から300人程である。そのうちキリスト教信者ではない割合もかなり高い筈である。

本稿では「クリスマスのおはなし」のプログラム構成とその変化の経緯について紹介し、教会音楽の宝を伝える使命、待降節・降誕節に教会音楽のコンサ

ートや集会を催すことの意味と、典礼以外の集会であっても聖歌や讃美歌を共に歌うということの意味について考察し、教会が地域社会へ自然な形で提供できる福音告知のささやかな提案としたい。

1. 経緯

発端は2002年12月8日にカトリック南山教会において神言神学院主催で神学生養成支援のためのチャリティーコンサートとして行われた「待降節と降誕説のオルガンと聖歌による Advent Organ Concert」である。

様々なコラール編曲オルガン作品を合唱と、参加者による讃美歌斉唱を取り混ぜて企画された。合唱は名古屋聖霊短期大学合唱団と南山大学「キリスト教芸術（典礼音楽）」の受講生および南山大学瀬戸キャンパスの有志学生による Chorus Angelorum が担当した。プログラムはパイプオルガンが作品を提示した後に合唱もしくは参加者の讃美歌斉唱が歌われる形式で、

- ・シオンの娘よ、喜べ Tochter Zion, freue dich
- ・星々の優しき造り主よ Conditore alme siderum
- ・目覚めよと呼ぶ声あり* Wacht auf, ruft uns die Stimme
- ・いま来たりませ、救いの主イエスよ* Nun komm, der Heiden Heiland
- ・来たりたまえ、われらの主よ* フランスキャロル
- ・天のかなたから* Vom Himmel hoch, da komm' ich her
- ・エッセイの根より Es ist ein Ros entsprungen
- ・いざ歌え* O du fröhliche

以上8つの聖歌・讃美歌と、それらを定旋律として作曲されたパイプオルガン作品が演奏された。参加者は*印がついた聖歌・讃美歌を歌った。

1年後の2003年12月6日にカトリック南山教会で南山キリスト教教育センター主催「神言会・聖霊会 創立者・宣教師 聖アーノルド・ヤンセンと聖ヨゼフ・フライナーデメッツ列聖に捧げる 待降節と降誕節のオルガンと聖歌によるコンサート」が催された。

プログラムはコンサート形式で、以下の通りである。聖歌は名古屋聖霊短期

大学合唱団 Chorus Angelorum と南山大学 Schola Cantorum によって演奏された。

「待降節と降誕節のオルガンと聖歌によるコンサート」(2003)

第一部 待降節

グレゴリオ聖歌 Veni, redemptor gentium

J. S. Bach (1685-1750) Nun komm, der Heiden Heiland BWV 659 (オルガン)

ルター讃美歌 Nun komm, der Heiden Heiland (混声合唱)

J. S. Bach Nun komm, der Heiden Heiland BWV 661 (オルガン)

第二部 クリスマスキャロルとオルガン

グレゴリオ聖歌 Hodie Christus natus est

ルター讃美歌 Von Himmel hoch, da komm ich her (女声合唱)

J. S. Bach Vom Himmel hoch, da komm ich her BWV 738 (オルガン)

ドイツ聖歌 (17 世紀) Jauchzet, ihr Himmel (女声合唱)

J. S. Bach Kommst du nun Jesu, vom Himmel herunter BWV 650

ドイツキャロル (14 世紀) In dulci Jubilo (混声合唱)

J. S. Bach In dulci jubilo BWV 729 (オルガン)

ドイツキャロル (15 世紀) Es ist ein Ros' entsprungen (混声合唱)

J. G. Herzog (1822-1909) Es ist ein Ros' entsprungen (オルガン)

ラテン語聖歌 (17, 18 世紀) Adeste fideles (合唱・会衆)

C. Sattler (1874-1938) Einleitung, Fuge und Finale über Adeste fideles (オルガン)

第三部 オルガン交響詩“降誕の神秘”

A. Fauchard (1881-1957) Le Mystère de Noël

降誕節賛歌“万人の救い主イエス”によるコラール変奏曲形式交響詩

テーマ：神秘 「みことばは人となった！ともにあがめたたえよう。(ヨハネ 1,14)」

変奏曲 1：神の子 「ひとりのみどりごがわれわれのために生まれた。ひとりの男の子がわれわれに与えられた。(イザヤ 9,6)」

変奏曲 2：羊飼いたち 「羊飼いたちは急いで行き、かいばおけに寝ている乳飲み子を捜しあてた。(ルカ 2,16)」

変奏曲 3：聖母マリア 「マリアはこれらのことを心に留めた。(ルカ 2,19)」

変奏曲 4：星 「星が先立って進み、幼な子のおられる場所の上まで来て止まった。(マタイ 2,9)」

変奏曲 5：苦悩の祈り 「万物の創り主よ、わたしたちを想い起こしてください。あなたは世の救いとしておいでになります。(“主の降誕”祭日の賛歌より)」

変奏曲 6：全世界の歌 「星と大地と大海原は、新しい歌をもってあなたを喜び迎えます。(“主の降誕”祭日の賛歌より)」

変奏曲 7・フィナーレ：人性の賛歌 「イエスよ、栄光は世よあなたに。(“主の降誕”祭日の賛歌より)」

第1部、第2部では聖歌と、聖歌の旋律や内容を楽曲に反映したパイプオルガン用のコラール編曲作品を演奏した。2002年にはパイプオルガンで作品を演奏した後に聖歌・讃美歌が歌われる形式であったが、2003年には先に定旋律の聖歌・讃美歌を提示し、ノンヴァーバルなオルガン作品の内容が理解しやすい様にした。フォシャード作の「降誕の神秘」は、降誕祭第一晩課に歌われるグレゴリオ聖歌賛歌 *Jesu, Redemptor omnium* をテーマとして作られたパイプオルガン作品で、テーマと7つの標題的音楽的な変奏曲から成り立っている。これにグレゴリオ聖歌とオルガンが交互に演奏するアルタナーティム奏法を応用し、変奏曲の内容と賛歌の節の関連性を示した。

プログラム冊子には作品解説の他、それぞれの聖歌についての詳細な注釈と教会の祝うクリスマスについての簡単な解説を掲載し、演奏会の意図が信者でない聴衆にも判りやすく伝わる工夫をした。このクリスマスについての解説はその後2019年度の「クリスマスのおはなし」まで毎年掲載している。

この演奏会の基本理念「名古屋聖霊短期大学および南山大学の学生のコーラ

スとともに捧げる今日のコンサートが、二人の「列聖」を祝い、「受肉されたみことばの神秘」も導く光となりますように¹⁾を受け継ぐ形で 2005 年には愛知県芸術劇場コンサートホールにて南山大学短期大学部聖歌隊 Vox Angelica がブリテン作曲「キャロルの祭殿」等を南山学園と南山キリスト教センターの後援のもと演奏した。2006 年より場所を再度カトリック南山教会へ移し、12 月 17 日午後の時間帯にコンサート形式で南山短期大学の後援のもと「クリスマスコンサート」を開催した。

このコンサートではグレゴリオ聖歌交唱 Ave Maria と S. Karg-Elert 作曲のオルガン曲 Saluto Angelico の 2 曲、即ち聖母マリアへの祈りをプロローグとし、ルター讃美歌 Nun komm, der Heiden Heiland が歌われることから始まった。その後 Gelobet seist du, Jesu Christ, Vom Himmel hoch, da komm' ich her, Lobt Gott Christen allzugleich の 3 曲のクリスマス讃美歌とそれらに関連するパイプオルガン作品が演奏され、G. Fauré 作曲のマリア賛歌モテット 2 曲、オルガンと合唱で L.-Cl. Daquin 作曲ノエルと、フランス作品群が続いた。もろびとこぞりて、牧人ひつじを、荒野のはてに、きたれ友よ 4 曲が聖歌隊によって合唱された後、J. S. Bach 作のコラール編曲 Nun komm, der Heiden Heiland, BWV 661 がパイプオルガンで演奏された。

12 月 25 日以降に「クリスマスコンサート」を開催することは季節を先取りする日本人の感覚には適応しないため、この場合は待降節でも「クリスマス」の音楽を演奏することを表立たせた上で、待降節の作品でコンサートの前後を締めくくる形式を取った。

2007 年には 12 月 24 日 14 時より「パイプオルガンと合唱による楽しいクリスマスコンサート（後援：南山学園南山短期大学）」を開催した。厳格にはまだ待降節の時間であっても、それまでよりは降誕節祝日にもっとも近い日時にクリスマスの音楽を提供することができるようになった。

¹⁾ 南山キリスト教教育センター編『神言会・聖霊会 創立者・宣教師 聖アーノルド・ヤンセンと聖ヨゼフ・フライナーデメッツ列聖に捧げる 待降節と降誕節のオルガンと聖歌による吉田文オルガンコンサート』プログラム序言

プログラムの内容は、南山短期大学学生が音楽関連科目で演習をした降誕節のグレゴリオ聖歌やモテットを軸とし、関連性のあるパイプオルガン作品と交互に演奏する形式である。聖歌隊のレパートリーを考慮しながら、オルガン作品との内容の連携を図り、聖歌の内容についての解説、テキストと対訳、オルガン作品の解説を詳細に行った。

2008年より開催日は当時の天皇誕生日の12月23日と固定された。この年からは聖書朗読を中心に据え、「コンサート」の文言をタイトルから取り払った。聖書朗読と朗読箇所を描写する聖歌や讃美歌、これらの歌に基づいたオルガン作品の演奏を交互に行う様式を始めた他、それまではコンサート聴衆として来場していた参加者にも聖歌と一緒に斉唱するよう呼びかけ、2002年に行った形態を再度導入した。それまでの聴衆から聖歌と一緒に歌いたいという要望が多々あったことも理由である。2008年のプログラムは以下の通りである。

「パイプオルガンと合唱と聖歌によるクリスマスのお話」(2008)

① 待降節の聖歌

G. Unbehaun Macht hoch die Tür (オルガン)

聖歌「高く戸を上げよ (讃美歌 21, 233)」(Vox Angelica 以下 VA と省略)

② 聖書朗読 (ルカ 1,26-37)

グレゴリオ聖歌 Ave Maria (VA)

S. Karg-Elert Saluto Angelico (オルガン)

Fr. Schubert Ave Maria (ソロ)

③ 聖書朗読 (ルカ 1,38)

聖歌「エッセイの根より (讃美歌 21, 248)」(VA)

C. Sattler エッセイの根より (オルガン)

④ 聖書朗読 (ルカ 2,1-7 節)

グレゴリオ聖歌 Hodie Christus natus est (VA)

L.-Cl. Daquin ノエル・Hodie Christus natus est (オルガン&VA)

⑤ 聖書朗読 (ルカ 2,8-14)

M. Reger Gloria (オルガン)

合唱 Angels we have heard on high (VA)

一緒に歌いましょう！「あら野のはてに(讃美歌 21,263)」(参加者)

⑥ 聖書朗読 (ルカ 2,15-16)

合唱 The first Noel (VA)

一緒に歌いましょう！「まきびとひつじを(讃美歌 21, 258)」(参加者)

⑦ 聖書朗読 (ルカ 2,17-21)

G. Fr. Händel ハレルヤ (VA)

一緒に歌いましょう！「もろびとこぞりて(讃美歌 21, 261)」(参加者)

C. Sattler きたれ友よ

テーマ (オルガン)・合唱 (VA)・変奏曲 I (オルガン)・合唱 (VA)

変奏曲 II (オルガン)・合唱 (VA)・変奏曲 III (オルガン)・

一緒に歌いましょう！(讃美歌 21,259)(参加者)・変奏曲 IV (オルガン)・
フーガとフィナーレ (オルガン)

一緒に歌いましょう！「しずけき真夜中(カトリック聖歌集 111)」(参加者)

①群では開催日にはまだ待降節であるとの意識付け、そして演奏者と参加者全員が心の準備をするという意味合いを兼ねて待降節の讃美歌「高く戸をあげよ」を選択した。

②群から④群までは聖書の朗読と、朗読箇所を描写する聖歌やパイプオルガン作品を交互に演奏している。これまで催されてきた音楽が主体のコンサートとは異なり、ここで音楽は、聖書のことばをさらに深く心に響かせ、瞑想の機会を授ける仲介者としての役割を担うことになる。

⑤群から参加者は聴衆としてだけでなく、聖歌斉唱を通して神の言葉に答える参加者として集会に取り込まれる。本来の典礼で望まれる答唱としての詩編唱を一般のコンサート客層に求めることは不可能だが、11月半ば以降に巷で頻繁に耳にすることのある旋律の斉唱なら可能だと考えた。

⑦群はクリスマスの喜びが祝祭的な音楽とともに伝えられることを念頭に置いて選曲されている。ヘンデル作曲メサイアは周知の様に、特にクリスマスの内容のみを扱った訳ではなく、旧約から新約へと一貫した神の愛と救いの完成について歌われるオラトリオであるが、その中のハレルヤコーラスはクリスマスシーズンに演奏されることが多く、日本人にとってもクリスマスの喜びを何らかの形で音楽を通して感じることができる作品と考える。Sattler 作曲の *Adeste Fideles* はテーマと7曲の変奏曲およびフーガとフィナーレから成り立つイ長調のパイプオルガン作品であるが、聖歌隊が同調のモテット3節をレパートリーとしていたため、変奏曲とモテットを交互に演奏することが可能であると見え、上に挙げた順序での演奏とした。また、変奏曲 III (オルガン) の演奏に到るまでに聴衆は7回定旋律を聴いていることとなり、「もろびとこぞりて」等の旋律よりは知られていない聖歌であるかも知れないが、斉唱することはできると見え、組み込んでみたところ、特に問題なく歌唱できた。一つの聖歌をパイプオルガンソロ、合唱、聴衆参加の斉唱を通して一つの楽曲として繋げることにより、会場にはより強い一体感が生じたように思う。

その後南山短期大学で音楽指導を行っていた吉田徳子の退官に伴う南山短期大学聖歌隊 *Vox Angelica* の解散、南山大学エクステンションカレッジ受講者を中心として結成された「名古屋グレゴリオ聖歌を歌う会」とカトリック南山教会聖歌隊有志の参加、聖霊中学校聖歌隊有志と、教諭であり聖歌隊指導にあたるシスターのソリストとしての参加、そして名古屋女子大学音楽ゼミナルによるハンドベル演奏の参加等、演奏者が年々若干変化していったことによりプログラムも毎年わずかであるが変更を重ね、2018年度には以下の様相を示していた²。

「パイプオルガンと合唱と聖歌によるクリスマスのお話」(2018)

² 2018年度は天皇誕生日が日曜日であった為、22日(土)に開催。

- ⑩ Preludium (前奏)
 ウェールズ地方民謡「ひいらぎ飾ろう」(ハンドベル)
 聖歌「いざ歌え」(ハンドベル)
- ① Invivatorium (祈りへの招き)
 グレゴリオ聖歌 Deus ad adjutorium meum intende (グレゴリオ聖歌隊)
 J. Gallus Deus ad adjutorium meum intende (聖霊中学校有志)
- ② Veni redemptor gentium
 J. S. Bach Nun komm, der Heiden Heiland BWV 659 (オルガン)
 グレゴリオ聖歌 Veni, redemptor (グレゴリオ聖歌隊)
 讃美歌「いま来たりませ (讃美歌 21, 229)」(聖歌隊)
- ③ 聖書朗読 (ルカ 1,26-37)
 グレゴリオ聖歌 Ave Maria (VA)
 S. Karg-Elert Saluto Angelico (オルガン)
 C. Saint-Saëns Ave Maria (ソロ)
- ④ 聖書朗読 (ルカ 1,38)
 讃美歌「エッセイの根より (讃美歌 21, 248)」(聖歌隊)
 C. Sattler エッセイの根より (オルガン)
- ⑤ 聖書朗読 (ルカ 2,1-7 節)
 グレゴリオ聖歌 Puer natus est nobis (グレゴリオ聖歌隊)
 J. S. Bach Ich steh an deiner Krippen hier
 O Jesulein süß, o Jesulein mild (ソプラノ独唱)
- ⑥ 聖書朗読 (ルカ 2,8-14)
 グレゴリオ聖歌 Hodie Christus natus est (グレゴリオ聖歌隊)
 L.-Cl. Daquin ノエル・Hodie Christus natus est (聖歌隊)
 一緒に歌いましょう! 「あら野のはてに (讃美歌 21,263)」(参加者)
- ⑦ 聖書朗読 (ルカ 2,15-16)
 一緒に歌いましょう! 「まきびとひつじを (讃美歌 21, 258)」(参加者)
- ⑧ 聖書朗読 (ルカ 2,17-21)

G. Fr. Händel ハレルヤ（聖歌隊・聖霊中学校有志）

⑨ 祈り

平和を求める祈り（参加者全員）

グレゴリオ聖歌 Pater noster（グレゴリオ聖歌隊）

Fr. Poulenc Priez pour Paix（ソプラノ独唱）

⑩ Jubilate Deo omnis terra

一緒に歌いましょう！「もろびとこぞりて（讚美歌 21, 261）」（参加者）

C. Sattler きたれ友よ

テーマ（オルガン）・合唱（聖歌隊・グレゴリオ聖歌隊）・変奏曲 I

（オルガン）・一緒に歌いましょう！（讚美歌 21, 259）（参加者）・

フーガとフィナーレ（オルガン）

⑪ Postludium（後奏）

聖歌「しずけき」（ハンドベル）

一緒に歌いましょう！（カトリック聖歌集 111）（参加者）

2008年当初と比較して、聖書朗読と朗読に連携した音楽的部分に若干の変更点が見られるものの内容的に大差はない。反面、聖書朗読前後に *Ingressus*、賛歌、祈りなど時課の要素を取り入れることによって、より一層「祈りの集会」としての性格が表れてきた。

2019年には平成天皇退位と新天皇即位に伴い、天皇誕生日の祝日が改められた。この事と、会場となる教会の都合により2019年度は12月14日（土）の開催となり、再度待降節の要素を強く本企画に組み入れる必要性に迫られた。

結果、開催日の12月14日から23日までの道のりをアドベントカレンダーに因み1日1 mottoとして捉え、「みんなで歌おう！パイプオルガン・合唱・聖歌・ハンドベルによる音楽のアドベントカレンダー そして、クリスマスのお話」というタイトルのもと、2018年度の①群と③群の間に待降節の作品群を挿入し、プログラムを構築し直した。

キリスト教信者でない参加者も考慮し、著名な作品と比較的知名度の低い作

品やグレゴリオ聖歌を取り混ぜ、音楽的観点からは演奏会として鑑賞しても成り立つプログラム順序とし、尚且つ「Ad te levavi - Populus Sion - Gaudete - Rorate」の順序を意識して以下の様に内容を構成した。

1. 心の準備をして待ち望むことを歌う聖歌・作品 (Ad te levavi 14 日, 15 日)
2. 受肉の神秘を音楽的に深く表現する聖歌・作品 (Populus Sion 16 日, 17 日)
3. 待降節で重要な 2 つのグレゴリオ聖歌を待降節部分中心に据えた。Rorate は唱えられる祈りの前後に交唱として歌われる (18 日, 19 日)
4. 喜びを表現する 2 曲の著名な作品 (Gaudete 20 日, 21 日)
5. 一つの賛歌を通して、創造から再臨を叙する壮大なコラール (Rorate 22 日, 23 日)

プログラム 「アドベントカレンダー」部分³ (2019)

14 日「高く戸をあげよ」

讃美歌「高く戸を上げよ (讃美歌 21,233)」(聖歌隊)

G. Unbehaun Macht hoch die Tür (オルガン)

15 日「目覚めよと呼ぶ声あり」

J. S. Bach Wachet auf, ruft uns die Stimme, BWV645 (オルガン)

16 日「神の御子が来られる」

J. S. Bach Gottes Sohn ist kommen, BWV600 (オルガン)

17 日「星々の造り主よ」

グレゴリオ聖歌 Conditor alme siderum (聖歌隊)

J. S. Bach Lob sei dem allmächtigen Gott, BWV 602」(オルガン)

18 日「天よ、露をしたたらせ」

グレゴリオ聖歌 Rorate caeli desuper (聖歌隊)

交唱と先唱者による祈りを交互に行う

³ 本プログラムの全容は文末に資料として掲載する。

19日「おお エッサイの切株」

グレゴリオ聖歌 O Radix Jesse (聖歌隊)

20日「アヴェ, マリア」

Fr. Liszt Ave Maria von Arcadelt (オルガン)

21日「シオンの娘よ, 喜べ」

A. Guilmant Paraphrase über „Tochter Zion, freue dich“ (オルガン)

22日 「いま来たりませ I」

グレゴリオ聖歌 Veni, redemptor gentium (聖歌隊)

J. S. Bach Nun komm, der Heiden Heiland, BWV 599 (パイプオルガン)

23日 「いま来たりませ II」

讚美歌「いま来たりませ (讚美歌 21,229)」(聖歌隊)

J. S. Bach Nun komm, der Heiden Heiland, BWV 601 (パイプオルガン)

この後ルカ書 1,26-37 の聖書朗読から, 前年までとほぼ同様の形式で続く。前年度と比較して大きな変更点はないが, 待降節部分で予定時間の半分程を必要とした為数曲割愛した他, 最後の作品を「来たれ友よ」から「いざ歌え」に変更した。

2. 教会音楽の宝の保存と促進・教会コンサート

以上, 一つのコンサートとして蒔かれた種が十数年かけてその時々が必要に応じながらその姿を福音朗読と音楽が一体化した集会の形と変化させてきた様子を記録した。

そもそも教会は「教会音楽の宝を細心の注意を払って保存し, 促進しなければならぬ」(SC 114)⁴使命を担っている。典礼省からは 1987 年に「教会聖堂

⁴ カトリック中央協議会編 第二バチカン公会議公文書改定公式訳, 2013 より「典礼憲章 (SC)」

内でのコンサート」についての声明『聖堂内でのコンサート』⁵⁾が発表され、その声明には聖堂内コンサート実施にあたっての具体的な見解と指針が示されている。教会音楽は敬虔さや宗教心を促進することができるため、教会堂の神性さが守られ、教会音楽の目的が果たされる場合にはコンサートの開催は有益であるとされている⁶⁾。

2005年にドイツ司教団は、より具体的な手引書「典礼以外に聖堂で演奏される音楽」を発行し、前書きにおいて当時の司教団代表であったレーマン枢機卿は「典礼外の聖堂での音楽が文化的だけではなく、司牧的なチャンスの機会として認められることを期待する。」⁷⁾と述べている。本文導入部には、以下の様子が書かれている。「特にドイツ語圏の教会では、典礼外での音楽演奏の伝統は、隣人への文化的奉仕であるとともに、『宣教的な教会』を体現する伝統的なものでもある。この文化的奉仕とキリスト教の福音告知のコンビネーションは他に類を見ない特別なものでもある⁸⁾。」

日本のカトリック教会の現状はどのようなものだろうか。日本オルガン研究会が発行する本稿執筆時（2020年1月）最新のオルガンコンサートガイドには2019年11月7日から12月13日まで開催されるパイプオルガンがメインとなった催しものが掲載されている。このガイドには総計130回のコンサート・メディテーション・オルガンによる礼拝などが挙げられており、教会で行われるものは55回、学校施設で行われるものが40回、コンサートホール等で行われるものが35回あり、4割強が教会で催されていることが判る。そのうちカトリック教会での催し物は5回、カトリック系学校施設では3回の催し物が記載されている。

⁵⁾ Sekretariat der Deutschen Bischofskonferenz (Hsg.), Verlautbarungen des Apostolischen Stuhls 81, Kongregation für den Gottesdienst, Erklärung über „Konzerte in Kirchen“, Bonn 1987

⁶⁾ 声明の全文（ドイツ語より私訳）およびドイツ司教団の手引書内容要約については南山短期大学紀要36号拙著（吉田徳子と共著）を参照

⁷⁾ Sekretariat der Deutschen Bischofskonferenz (Hsg.), Arbeitshilfen 194, Musik im Kirchenraum außerhalb der Liturgie, Bonn 2005, 4

⁸⁾ Ebd., 8

このリストでは単純に、パイプオルガンを使用したコンサートや催し物が挙げられているだけなのでパイプオルガンを持たない教会の集会は挙げられておらず、一概にカトリック教会でのコンサートや典札外の集会が少ないとは言いきれないが、反面、音楽を通じた積極的な司牧が行われているとも明言できない。

コンサート等の為に聖堂を解放する催しを公けに行うということは、幾つもの大変デリケートな課題と向き合うということでもある。ドイツで教会音楽家として勤務していた筆者の経験からも、小教区が自主的に主催するものは主任司祭と専門的養成を受けた教会音楽家が協議しながら企画実行するものなので特に大きな問題は生じなかったが、外部からの聖堂使用依頼には多々な要素が絡み合い、その都度ケースバイケースの処理が必要で、小教区の需要に合わせた的確な判断を下すにはある程度の経験値が必要とされた。演奏される作品が教会聖堂で演奏されるのに相応しいものであるか判断されなければならないのは当然のことながら、演奏者の基準や心構えについての細かな規定はなく、定めることも不可能である。

例えばキリスト教会に属さない演奏者もしくは団体が純粋な教会音楽のプログラムを提案し、聖堂の使用許可を申請したとする。この演奏者がコンサートホールの代用として聖堂を使用したいのであれば、聖堂の使用目的とは遠ざかっている。教会という特別な場所の雰囲気に関心がある、教会の方が集客効果があるというだけの動機も同様と考える。しかし、演奏者が教会音楽や信仰を真摯に研究し、本来の場で演奏経験を積みたいと考えている場合にはどう判断されるべきなのか。仮に、許可が下り教会聖堂で演奏した場合に、霊的なものへの傾倒が促され、より深い信仰心が湧き出たとする。これは演奏の機会がなければなかった筈の経験となり、神との対話の始まりともなりえる。実際にグレゴリオ聖歌隊や宗教作品を中心に演奏する団体に属したことがきっかけで受洗へとつながったケースもある。聴衆においても、同様のことを全員に望むことは不可能でも、音楽という心を動かすことができる媒体は、神という見えない存在を信じることや、神との対話の手助けとなるかも知れない。

反対のケースを考えてみる。例えば、ミサ奉仕をする聖歌隊員やオルガニストに自己顕示欲や自己満足、他者排除の動機があるとしたら、どうなのだろうか。オルガニストや演奏者が拍手喝采を求めて宗教作品を演奏するとしたらどうなのだろうか。

明確かつ絶対的答えはないが、土屋（1996）は典礼の中における音楽の担い手について以下の様に述べている。

典礼から生まれた諸芸術が、典礼を中心にその周りを巡り、典礼を豊かに表現していく限り、それは典礼芸術である。しかし、芸術に限らず、自己を中心に自ら回転し、自己を展開していこうとする遠心力がある。音楽も合唱も、典礼の求心力から離れて自己を中心に絶対化していけば、それは典礼から出たキリスト教芸術であるといわれても、もはや典礼に機能的に奉仕することができないばかりか、ときにはそれを妨げる結果になりかねない。⁹

典礼のみならず、典礼外でのコンサートや集会の演奏者にも全く同様の心構えは必要とされるだろう。

その他聖堂使用に関しての規定や入場料を含めた金銭的なこと、損害発生時の責任賠償問題など契約に関する現実的な課題が幾つも発生することや、ある一つの団体に聖堂使用許可を与えた場合他の団体を断りにくくなるという面からなど、実際は聖堂を典礼以外のことに解放することに躊躇する小教区は少ないと思われる。

前述の手引書が発行されたドイツ教会の土壌としては、司教座聖堂は当然のこと、修道院教会や小教区などでも定期的あるいは不定期的なオルガンコンサートやコンサートシリーズ、もしくは宗教音楽を通じた集会を催し、パチカンの指針 9 条¹⁰に示された使命を果たそうとしている。これらのコンサート等催

⁹ 土屋吉正『典礼の刷新』,1996, 169 頁

¹⁰ 『聖堂内でのコンサート』9 条

典礼のために作曲されたものの上記の理由からもはやミサ聖祭等の典礼に用いられなくなった教会音楽や、聖書の言葉や典礼からインスピレーションを受けた、あるいは神、おとめマリア、聖人、教会を主題とした宗教音楽はすべからず教会内にその場を占

しや集会には必ずしも信者のみが集まる訳ではなく、ドイツ国内でも信仰生活から離れた人や信仰生活を知らずに育った人、観光客や音楽愛好家など様々な背景と動機から聴衆は集まってくる。

教会の聖堂という特別な場所へ音楽を聴きに来るということは、祈りの場であり神の住まいでもある「特別な空間」に、心が「何か」を求めてくる機会でもあると考える。そしてそれが何かと言えば、「神との対話」なのではないだろうか。

3. クリスマス・コンサート

しかし、日本で宗教音楽・教会音楽が演奏される機会として「クリスマスコンサート」程多いものはない様に思われる。クリスマスとは関係ない宗教作品が同時期に演奏されたりラジオで放送される傾向もある。

クリスマスはキリスト教会が祝う記念日であるのにも関わらず、周知の様に日本では宗教とはかけ離れたお祭りとなっている。堀井（2017）¹¹によれば、明治半ばごろから外国人居留地でのクリスマスが知れ渡り、1910年には寄せ芸の様な出し物が帝国ホテルの「クリスマスお楽しみ会」として演じられるなど、既に20世紀初頭より「クリスマスはキリスト教と関係なく騒いでいい日」と認

めるものであるが、しかしそれは聖祭典礼以外の場合においてである。オルガンの響きや、その他の声楽、器楽の演奏は敬虔さや宗教を促進することができる。これらを典礼外で上演する際、とりわけ下記の諸点がふさわしい。

- a) 大切な典礼の祭日に心の準備をさせるため、もしくはミサ聖祭以外においても、祝祭の性格を高める。
- b) さまざまに異なる典礼暦の特別な性格を強調するため。
- c) 教会堂の中に静けさと観想の雰囲気をつくり、教会からはなれている人たちにも霊的なものへの傾倒を促すため。
- d) 神の言葉を伝え、その受け入れを容易にする環境をつくり、たとえばそのなかで福音書を（続けて）朗読する。
- e) 失われてはならない教会音楽の大きな宝を守るため。今日ではもうそのままでは容易に典礼に取り入れられない作品や声楽曲などを指す。オラトリオやカンタータなど今日においても霊的な豊かさを与える宗教音楽もそうである。
- f) 教会堂を訪れる人や観光で来る人たちに教会の神聖な性格をより良く理解する助けとなるために。例えば決まった時間にオルガンコンサートを行うなど。

¹¹ 堀井憲一郎『愛と狂瀾のメリークリスマス』（講談社現代新書, 2017）

識されていたらしい。木村(2007)¹²は、日本人は「隣人愛(アガペー)の宗教」の「愛」のみ取り出し、「恋愛」と混同した結果「クリスマスやバレンタインデーの際に『恋愛の神』に祈りを託し、「新しい神道行事の一つ」として定着させた」と解釈している。

キリスト教に関わらない日本人にとって降誕節は「光」、「幼子」、「天使」など一見明確と感じられる要素が多く含まれ、「贈り物」など商業的な要素も含めると「受難」や「復活」よりも格段に、日常生活に統合し易い祝日であることは確かである。

日本人がどのような動機で年末時期にクリスマスコンサートを訪れキリスト教宗教作品を鑑賞するのか、特に教会コンサートからは何が期待され、何が伝わっているのかは、個々の文化的・宗教的背景と人それぞれが置かれた家庭や社会の状況、個人の心理的な状況や環境により異なるだろう。詳細な調査は今後の課題である。しかし、「コンサート」へわざわざ出かける動機と云えば、音楽を通した何らかの経験値を期待していることである。仮定ではあるが、「教会」で「クリスマス」の「コンサート」に期待されることとしておそらく、非日常的である特別な機会に、実際に演奏される音楽を本物の空間で経験するということではないかと考える。

クリスマスが当然の如く日常的なカレンダーに記載されていることから、日本人の生活の少なくとも一イベントとして認識されていることは間違いない。表面的であれ身近に感じられているクリスマスではあるが、その本質は非信者にとって非日常的である。そのような機会に、感性に訴えかけることのできる音楽を使った集会を提供することは文化的奉仕のみならず、宣教的な教会を体现することのできる一つの機会であると考ええる。

4. クリスマス・歌

クリスマスの時期に歌を歌う習慣はヨーロッパでは慣習的となっており、教

¹² 日本宗教学会『宗教研究 81 巻(2007)』4号、木村文輝 『日本人の宗教意識とクリスマス - 「愛の神」をめぐる -』

会から離れた人たちにとってもクリスマスの歌は比較的知られている。

クリスマスの歌は幾つかの異なった起源で分類することができる¹³。1点目はミサや聖務日課などの典礼に由来するものである。降誕節固有の賛歌や答唱は現在でもグレゴリオ聖歌の重要なレパートリーとして伝わっているものも多い。2点目として中世の時代から特に西ヨーロッパ文化圏で成立した民衆的なクリスマスの歌が挙げられる (*In dulci jubilo*, *Quempas*, *Reonet in laudibus* など)。一般民衆でもわかり易く憶えやすい程度のラテン語が使われていることが特徴である他、民衆の言葉であるドイツ語が混在するものもある。また、聖歌の終わりに「*Kyrie eleison*」が付け加えられるライゼンもこの時期に成立した。これらの聖歌は典礼の中にも取り込まれた。宗教改革の重要事項として教会の中でのドイツ語を促進させたマルティン・ルターによりドイツ語讚美歌のレパートリーは比類なく豊かなものとなったことが3点目として数えられ、その後教会典礼との大きな関連性なく創作された民衆的な歌が4点目として挙げられる。クリスマスの歌として最も有名な「きよしこの夜 (讚美歌 21,264) (カトリック聖歌集 111)」は1818年に創作され、その後19世紀後半には、*O Tannenbaum*, *Kling, Glöcklein* など家庭の中で祝われるクリスマスの雰囲気盛り上げる民衆的な歌が多く創作される様になる。創作された多くの歌は飼い葉桶に横たわる幼子イエスを描写したのも少なくなく、教会での使用を念頭に置いた場合、典礼で使用するよりは、厳格な意味としての典礼ではない祈りの集会での使用の方が適切である。

このうち、グレゴリオ聖歌やグレゴリオ聖歌から派生した歌は専門的な養成を受けていることが歌唱の前提となるため、一般人が歌うことは困難である。

反面、民衆的な歌は、中世以降も文字が読めない一般大衆の間で伝えられてきたという意味では歌いやすく憶えやすい類であると言えるだろう。また、ル

¹³ 讚美歌学関連については、主に以下の文献を参照。

Edith Harmsen, Bernd Willmes (Hsg.), *Musik in der Liturgie*, Petersberg, 発行年度不明
Hansjakob Becker, Ansgar Franz, Jürgen Henkys, Hermann Kurze, Christa Reich, Alex Stock (Hrs.), *Geistliches Wunderhorn*, München, 2001
Meinrad Walter, *Ich lobe meinen Gott...*, Freiburg, 2015

ター以降プロテスタント教会で形成された讃美歌の形は、庶民的・民族的な要素が基礎となって生まれている。その後には作られた家庭向けクリスマスの歌も同様である。

この様な理由から、「クリスマスのおはなし」ではグレゴリオ聖歌や練習を要する作品は演奏者が歌い、旋律が特に良く知られている讃美歌を会衆とともに歌うという形式が定着していった。

ここで歌われるものは讃美歌ではあるが、カトリック教会の公文書では「民衆の歌」に分類されるものであると解釈している。ピウス 12 世の教会音楽についての回勅によれば、「教会から派生し教会の保護のもとに発展した『民衆の歌』と呼ばれるものは、教会聖堂内の典礼以外の集会においても聖堂外の祝いや祝典においても、経験によれば、信者の心に大きな救いの力をもたらすことができ、国語で歌われることの多いそれらの旋律は無理なく気がつかないうちに記憶に刻みこまれるとともに、ことばと文節も旋律とともに精神に残り、何度も繰り返されるうちに深く理解されることとなる。¹⁴」と、民衆の歌を典礼外の集会において歌うことも推奨されている。

5. ヒトと音楽・歌

そもそも人間はなぜ歌うのだろうか。計り知れない先行研究が多々の分野からされているが、本項では教会でのクリスマスコンサートないし音楽を使った集会において音楽を聴き、共に歌うという行為について、非常に表面的であるが簡単に分析したいと思う。

音楽表現は、特定の意味内容を伝える言葉と異なり、言葉では表現しきれない印象、感情、雰囲気などを表現することができる。また、音楽表現においては、一次表現者の作曲者と二次表現者の演奏者の両者ともが表現する者として

¹⁴ Papst Pius XII., Enzyklika über die Kirchenmusik „Musicae sacrae disciplina“ (25.12.1955), AAS 48 (1956) 5-25; EL 71 (1957) 37-53
Hans Bernhard Meyer, Rudolf Pacik (hrs.) Dokumente zur Kirchenmusik, Regensburg, 1981, 66 頁より私訳

存在し、作曲者と演奏者の共感のうちに（多くの場合は演奏者が作曲者に共感するうちに）先ず表現されるべきものが現れる。その後、コンサートなどの場に置いて、演奏者と聴き手が共感しあうという関係性が他の芸術表現とは異なる性格を持っているが、聴き手が演奏者を通して時空を超えた作曲家や創作者と共感しあうことができるということも特徴だろう¹⁵。共感し合うということは本能的な心地良さを引き出すことができるが、コンサートなど実際にその場で音楽を共有する場合に、聴き手が自分の存在そのものを音楽を通して肯定されていると感じる感情を引き起こすこともできると考えられる。

歌うという行為は声を使う訳だが、言語を持たなかった時代のヒトはコミュニケーションの手段として声帯を使い、様々な声音を使い分けることによりやがて言語が発生したと多くの説で説かれている¹⁶。言葉のもつ自然なリズムから拍が生まれ、声の抑揚からは旋律が生まれ、他者と声を合わせたり掛け合ったりすることによりハーモニーが現れてくる。「歌うこと」はヒトの表現と密接に繋がり、音楽のはじまりが「歌うこと」から生まれたとも言えるだろう。

民族音楽学者の小泉（2003）は種族がまとまって行動することが種族保存の条件であった首狩族の調査結果から「音楽の原点、歌の原点には、人間が生きているという本能的な生存に関係があった」としている。協働するときにはリズム（拍）をそろえて歌われるが、ハーモニーが合うか合わないか、すなわち歌に調和があるかないかで種族の気持ちの一致団結状態が計られるというのだ¹⁷。

Welch（2012）は、コミュニケーションとしての歌唱を考察する中で「社会的かつ文化的な集団に関するコミュニケーションとしての歌唱について一定の重要な特徴がある」とし、その一つとして「集団アイデンティティと社会的絆の一形式」を挙げている¹⁸。典礼に於いては入祭唱に表されるように、共に歌うと

¹⁵ 石井玲子編『実践しながら学ぶ子どもの音楽表現』（保育出版社,2018年）15頁

¹⁶ 言語と音楽の関係については、主にジョーゼフ・ジョルダーニア『人はなぜ歌うのか?』（アルク出版,2017年）を参照。

¹⁷ 小泉文夫『人はなぜ歌を歌うか』（学習研究社,2003年）100-119頁

¹⁸ D.ミール,R.マクドナルド,D.ハーグリーヴズ編 星野悦子監訳『音楽的コミュニケーション』（誠信書房,2012）

いう行為は共同体の心をついにまとめるということでもある。スポーツ観戦の際に歌われる歌や国家・校歌などは、アイデンティティを定義づけ、集団に所属するという意識を高める。

音楽生理学の観点から執筆した福井(2014)によれば¹⁹、古来よりヒトの社会は音楽を通した絆によって築かれていたが、社会のつながりが崩壊した現代では「音楽を社会の再構築の中心に据えるべきである。音楽にはその力がある。」と説き、学校教育においても音楽の本質である喜びを伝える重い責任があると述べている。この責任は、信仰の共同体である教会にも置き換えることができるのではないか。

その他音楽心理学の分野²⁰からは、歌や音楽はその性質から感情に良好に働きかけることができる²¹とされている。音楽が医療や教育の現場で応用されたり、療法として使われたり²²、癒し・やすらぎと言ったキーワードと組み合わせられて使われることが多いことから察せられる。先行研究は際限なく存在するが、一例として前出の福井の説を挙げれば、高齢者を対象とした合唱活動は体内のステロイド・ホルモンを自然に調整し、ストレスも著しく低下することが証明されている²³。

音楽文化学の視点からは、現代では「音楽を聞く・聴く」意味が「音楽産業そのものの変化により音楽の価値感が新たに規定されていく」と説いている²⁴。それまで「自然環境、社会環境、宗教、その他の環境の主要素と深く関わりながら伝承されてきた生活文化としてのさまざまな音楽」が「個別の文化のなかで生まれ、評価され、継承されてきた」のであるが、CDや電子メディアの導入

¹⁹ 福井一『音楽の感動を科学する』（化学同人, 2014）53, 250, 254 頁

²⁰ 詳細は 佐瀬仁『音楽心理学』（音楽之友社, 1991）106-119 頁

²¹ 同著 119 頁「精神的充実のための教育は芸術、特に音楽をとおすこと以外にその方法はないはずである。なぜならば、音楽は純粹美の芸術であって人間情操のすべてに共通する豊かなユニバーサリティー（universality）を内包していると同時にまた、人間情操の根源でもあり、またもつと素朴な感情生活の五つの方向とも一致するものであるから」

²² 詳細は 櫻林仁監修『音楽療法』（芸術現代社, 1993）参照

²³ 福井 205 頁

²⁴ 小西潤子, 仲万美子, 志村哲編『音楽文化学のすすめ』（ナカニシヤ出版, 2012）

により「地域文化としての音楽」と「CD ショップの棚に並ぶ音楽」の概念が平行して異なったものとして存在していると指摘している。

もちろん音楽は歴史を辿る上で様々な様相を示しているが、福井は現代のヒトが「イヤホンを耳に、自分だけの音楽を聴きながら闊歩している姿」を「音楽の『個人化』」²⁵と表現する。

すなわち現代社会では、個人で音楽を「創造」することよりも「消費」することの方が多くなってきている。それも、自分自身で音楽を生み出すよりも産業的に生み出された音楽をメディアを通して消費する機会の方が、格段に多いだろう。

しかし、人間の基本的な表現行為である「歌う」ということは、人間に与えられた一番身近に音楽を創造する方法でもある。表現したい・創造したいという欲求を一番原始的な方法で満たすことができるのは、歌うことである。

教会で讃美歌に出会った経験を小泉は

大勢の人が声を合わせて作り出すハーモニーの持つ美しさを経験
いたしましたことは、強烈なものを私に与えました²⁶。

と描写しているが、「強烈なもの」とは一体何なのだろう。

カトリック教会では、歌いながら捧げられる典礼の形式について「典礼聖省による聖なる音楽についての指針」5条に「(...) 心の一致は声の一致によりより深くなされ、精神は聖なる祭儀の美しさによってより天上にまであげられ、そして祭儀全体は、聖なる都市エルサレムで行われる天上の典礼をよりはっきりと先取りする。」と示している²⁷。

これらの説を基に「クリスマスのおはなし」が受容される背景として、以下の仮説を立てた。

公共の場である教会堂に於ける集会でその場に集まった参加者が歌を歌う

²⁵ 福井 50 頁

²⁶ 小泉, 266 頁

²⁷ INSTRUCTION DE MUSICA IN SACRA LITURGIA, AAS, 1967, 300-320

日本語訳は <https://blog.goo.ne.jp/giuliano-liszt/e/58358079c92bcd3d28db666a5506d0bd> を参照 (最終閲覧 2020.01.21.)

という行為は、音楽が参加者にとって「与えられるもの」から「自ら表現するもの」となる。現代社会では皆無となってしまった「共同体で歌う・表現する」という経験ができる機会を、意識的ではないかも知れないが、求めているのかも知れない。参加者は一人ではなく多くの参加者と共にオルガン伴奏によって斉唱するので、ある程度の安心感を持って参加できることも重要であると考えられる。これらの聖歌・讃美歌は音楽的には現代の日本人が幼少の頃から慣れ親しんでいる唱歌と類似した形式を示している為、旋律的にも形式的にも特に違和感なく歌えることも好んで歌われる理由の一つだろう。一方で、同じ集会の中で訓練を受けた奏者が演奏する高度な技術を必要とする作品も同時に鑑賞できることにより、より一層満足感を得ることができる上に、演奏者と「同じ土俵で」演奏者となることにより自己肯定感を得ることができるケースもあるだろう。

また、社会に宗教観が希薄になってきた今日の日本では、クリスマスと年末年始あたりが宗教的なものを感じ取ることができる代表的な機会であると察する。聖歌・讃美歌は祈りが歌となったものだが、これらを既知の唱歌にも似た旋律にのせて歌うことにより、教会で祈ることに慣れていない非信者の参加者も抵抗少なく祈りに参加することができるのかも知れない。実際、数年前より聖歌を斉唱した後に「平和を求める祈り」を全員で唱える機会を設けているが、「平和の源である神よ、(...) わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。」と言う祈りの文言は全く抵抗無しに参加者によって祈られている。

6. 日本の教会とパイプオルガン・柴田南雄のエッセイより

もう一つの側面として、「本物の」パイプオルガンと共に歌うということも、参加者から期待されている「非日常的な経験」ではないかと考える。この場において多面的な考察は枠を超えてしまうため、作曲家・音楽評論家・音楽学者であった柴田南雄のエッセイを例にとってみる。柴田は「オルガン音楽について

て」²⁸の冒頭で

西洋人は子供の時から自分の育った町の教会で、パイプオルガンの音が脳天から降り注ぎ、腹の底から突き上げるように響きわたる中に身を置いて、そうした中で神と対話する習慣を日常のものとして成人する。もう、そここのところがわれわれ日本人には完全に欠落しているわけで、じっさいのところ、その欠落部分の埋め合わせもないわれわれにとってオルガン音楽との距離は無限に大きい、いや、大きかった、という思いを抱かざるを得ない。

と、描写している。このエッセイは1978年に書かれたものなので、現在ではパイプオルガンの個体数もオルガン奏者の数も当時とは比較にならない程増えている訳だが、柴田の

この現代においてもっとも威力のある、性能の高い独奏楽器は、むしろ純粹に演奏会用に徹することで、その将来の繁栄が保証されようである

の予測通り40年が経過している。

日本人の宗教心は禁欲的で倫理的な傾向が強く、豊麗なハーモニーを必ずしも要求しないのではなかろうか。そんなことから、日本ではキリスト教に限らず、宗教に伴う音楽はごく象徴的な簡素なものが昔も今も好まれるように思えてならない。堂に満ちて鳴り響くオルガンの響きは、繊細な日本人の信心には威力がありすぎはしないのだろうか。

という考察の通り、日本のカトリック教会では、オルガンは伴奏機能に徹する楽器となっている。筆者は日本でプロテスタント礼拝に預かった経験があまりないが、数少ない経験からは、プロテスタント礼拝に於いてもオルガンが記された楽譜を忠実に伴奏している姿しか記憶にない。

日本でパイプオルガン本来の多種多様な音色を経験しようとする、コンサ

²⁸ 柴田南雄『音楽は何を表現するか』（青土社、1981）139-143頁

ートホールで行われるコンサートで鑑賞する方法が一般的である。福音告知楽器としてのパイプオルガンが設置されている本来の場所、教会では、典礼や礼拝の中で楽器や作品が最大限使われる機会は少なく、限られた音色と機能しか使われていない。勿論典礼とコンサートは別のものとして論じられなければいけないが、典礼作品や教会音楽の作品が教会の典礼という本来の場で演奏される機会に恵まれず、その場をコンサートホールないし教会コンサートに移さずを得ない状況、そして「心を神と天上へと強く高揚させる伝統的楽器として、ラテン教会において、大いに尊敬されなければならない²⁹⁾とされているパイプオルガンのカトリック教会としての基本的な扱いについては、今後も検討される必要がある。

6. 今後の課題

これまで「クリスマスのおはなし」プログラム構成の経緯と、カトリック教会でクリスマスコンサートもしくは音楽を使った集会を行うということについて検討してきた。「クリスマスのおはなし」は教会側からも参加者からも概ね好意的に受け入れられて来ているが、課題点も幾つかある。

1 点目は、開催時期についてである。今でこそ 12 月 24 日はクリスマスの一日前・イブであり、本来の祝日は 12 月 25 日であるという事が一般的にも浸透してきてはいるが、12 月 24 日夕刻よりそもそも降誕節が始まり、主の公現までがクリスマスの時期であるということは浸透していない。12 月 25 日以降にクリスマスコンサート等の催しを行うことは、季節を先取りしたい日本人の感覚にもそぐわないとも考える。結果、「クリスマス」と題した催しを待降節に行わざるをえなくなってくるが、「待降節」と「クリスマス」のバランスをいかに配分するかということは依然と課題のままである。この課題はドイツ語圏でも同様で、Planyavsky (2012) は「繊細な感覚・勘 (Fingerspitzengefühl)」が必要だと述べている³⁰⁾。

²⁹⁾ SC 120

³⁰⁾ Peter Planyavsky, *Katholische Kirchenmusik*, Wien, 2012, 179

2点目は、どの程度まで、コンサートの雰囲気求めて訪れる参加者と、音楽を使った典礼に近い宗教的集会や *Pia Exercitia* に値する集会として参列する信者の両者の期待を織り込んでいくかということである。拍手に関しても非常に繊細な扱いが必要だと考える。

その他、プログラム内容の詳細に関しても、今後とも演奏者や参加者層の変化に応じて対応していきたい。

5. 終わりに

「人間が音楽に求めるものは一体何なのか」という疑問に対し、みつとみ俊朗は、

果てのある限定された人間の「生」という時間と空間の中に、果てしのない時間と空間を作り出すこと。なぜならば、音楽こそが、果てしのない時間空間、つまり、恐れ「異空間」にも喜びの「異空間」へも自由に行き来することのできるスイッチそのものなのだから³¹。

とまとめている。

人が教会音楽に何かを求めた場合、みつとみの言葉を借りれば音楽は「神と対話し」、「永遠性を感じる」スイッチになると言い換えられるだろう。

Musch は *Musik im Gottesdienst* の中で次のように述べている。

教会音楽が本物の、強く訴えかけることのできる芸術であるのならば、教会音楽はその元来備えている宗教的・精神的音楽としての使命から離れた典礼以外の場でも、人の表現として、また宗教的感性の表現として存在し得る³²。

教会音楽の目的は、神の栄光と信者の聖化である³³。「神の栄光を讃え神を敬うこと」と、「信者を聖化し人の宗教的感性の表現として心を動かすこと」がで

³¹ みつとみ俊朗、音楽はなぜ人を幸せにするのか、2006、182

³² Hans Musch, *Musik im Gottesdienst*, 4.Auflage, Regensburg, 1993, 8 頁

³³ SC 112

きる教会音楽の二面性は、「人の救いは神から与えられるものである」という Katabasis 的な観点と、「人がその救いを感謝のうちに受け取り神を賛美する」Anabasis 的な観点という典礼の二面性とも同期している。教会音楽は、神と人の対話の伝達手段でもあり得る。教会でコンサートや音楽を使った集会を催す場合にも、教会音楽はただ単に雰囲気伝えるだけのものではなく、信仰を伝えるものとして、また「聖なる都市エルサレムで行われる天上の典礼をよりはっきりと先取りする」³⁴ものとして存在している。教会音楽は共同体の信仰を一つのものし、福音を告知し、信仰を告白し、賛美と祈りを捧げるものである。

「クリスマスのおはなし」では一年に一回の機会となる参加者も多い中、そのひとときだけでも音楽を通して神を賛美し祈る教会と一致する機会となり得る。参加者が自然と喜びを持って賛美の歌を協働して歌うことができれば、教会が与えることのできる心の平和に必ず繋がるだろう。このように、教会音楽、特に民衆的な聖歌・讃美歌を使った集会のうちに、福音告知の起点の一つがあると考えられる。

巻末資料（次頁より）

2019年12月14日「クリスマスのおはなし」プログラム

³⁴ 注釈 21 を参照。

クリスマスについて

西ヨーロッパのキリスト教会では12月25日の4週間前の日曜日（今年では12月1日にあたります）からクリスマス前日の12月24日までの、この、今の時期を、キリストの降誕を待ち望み、私たちの心の準備をもする時期として、「待降節（アドヴェント）」と呼びます。例えばドイツでは、もみの木のリースや、最近ではモダンなフラワーアレンジメントにろうそくを4本立てたものを用意し、第1待降節の日曜日にはろうそくを1つ、第2待降節の日曜日にはろうそくを2つ、と点す習慣があります。クリスマスが近づくにつれて増す「光」は、近づいてくるキリストの降誕を象徴するだけではなく、降誕とそして再臨をも待ち望む希望が増していることも表しています。

そして、12月25日が本来のキリストの生誕のお祝いである「主の降誕の祭日」、いわゆるクリスマスであり、1月6日（もしくは2月2日）まで「降誕節」は続きます。

本来の祝日である25日ではなく24日に「クリスマスイヴ」として祝われる伝統は、祝日当日が始まる夜中より既に教会で祈りが捧げられていたことに依ります。

元は、ローマにて274年の12月25日に「不滅の太陽神の生誕」を祀る神殿が奉納され、以来12月25日という日が大きな国祭日となったのに対し、ローマのキリスト教会はこの日を「真」の太陽・光のこの地上に於ける公現、即ち「キリストの生誕日」として祝うようになったようです。

愛であり、光であり、その創造物である人間を無限の愛で包容する神が、人間もその神の愛の一部で在りえること、その愛によって神のいのちとして迎えられることができるように、神の子であるイエス・キリストを人間として、人間の救いのために遣わした記念、これがキリスト教会の祝うクリスマスです。

クリスマスにキャロルを歌ったり、お菓子やごちそうを作り、家を飾るなどといった、今日のような慣習が生まれ育ったのは9世紀から16世紀の間です。その後、「ロマンチックなクリスマス」というイメージが定着してきました。家庭では、キリストが生まれた馬小屋での光景を人形などで現したものや、生命の木のシンボルとして真冬でも緑の葉をつけるもみの木を使ったクリスマスツリーのまわりに集まって、聖書の句を聴いたり、歌を歌ったりするようになりました。

今日は、クリスマスの到来を待ち望む私たちの心を、アドベントカレンダーの窓を開けていくように、音楽に託したいと思います。そして少し早めですが、クリスマスの聖書朗読を聴きながら、クリスマスの日に備えて心の準備をしていきましょう。



プログラム

拍手は全プログラム終了後をお願いいたします。

前奏

- ・ ウェールズ地方民謡「お部屋を飾ろう」(ハンドベル)

祈りへの招き

- ・ グレゴリオ聖歌（聖歌隊）

神よ、わたしをカづけ、急いで助けに来てください。

栄光は父と子と聖霊に、初めのように今もいつも世々に。アーメン。

《音楽によるアドベントカレンダー》

- 14 日
- ・ 聖歌「高く戸を上げよ」（聖歌隊）

1. 高く戸を上げよ、いざ、門を開け。

救いといのちを この世にもたらす、 栄えの君なる 主イエス来たりたもう。 ほめたたえよ 造り主を。

2. 救いと正義に あふれたもう主は、 柔和を身に帯び、 憐れみをも手に、

われらの嘆きに 終わりをもたらす。 ほめたたえよ 救い主を。

- ・ G. ウンベハウン作曲「高く戸を上げよ」（オルガン）

- 15 日
- ・ J. S. バッハ作曲「目覚めよ呼ぶ声あり BWV 645」（オルガン）

1. 「起きよ」と呼ぶ声、「めざめよ、エルサレム」。夜警ら叫びて、闇夜をつらぬき、ひびきわたる声よ。

「備えよ、おどめら」。いざ、ともし火 高くかかげ ハレルヤ。花婿迎えよ、祝いの宴に。

2. めざめしおどめら 喜びてそなえぬ、 夜警らの声に。栄えに輝く 花婿なる主イエス いまこそ来ましぬ。

人となりし 神のみ子よ、ホサナ。聖なる宴に よろこびあずからん。

3. 「グロリア」とたたえよ、みつかいらとともに、たてごとかなで。

主の御座めぐりて 集う聖徒たちとうたごえあわせて。

未だ知らぬ この喜び、ハレルヤ。われらもうたもて ほめたたえよ、アーメン。

- 16 日
- ・ J. S. バッハ作曲「神の御子が来られる BWV 600」（オルガン）

神の御子が来られる 私たちをみな救うために。

私たちを罪より自由にし、解き放つために、貧しい姿にて この地上へ。

17日 ・ **グレゴリオ聖歌「星々の造り主よ」(聖歌隊)**

Conditor alme siderum, aeterna lux credentium,

Christe, redemptor omnium, exaudi preces supplicum.

星々の造り主よ、柔和な神、信じる者の永遠の光、すべての人の救い主のキリストよ、私たちの祈りを聞いて下さい。

・ **J. S. バッハ「全能の神に賛美を BWV 602」(オルガン)**

全能の神に賛美を 神は私たちをあわれみ 神の最愛の御子を遣わされた

いと高き玉座の中に 神からお生まれになった。(「星々の造り主よ」と同旋律)

18日 ・ **グレゴリオ聖歌「天よ、露をしたたらせ」(聖歌隊)**

天よ、露をしたたらせ、雲よ、正義を降らせよ。

・ **朗読と祈り**

天よ、露をしたたらせ、雲よ、正義を降らせよ。

大地よ、開いて救い主を生み、正義の花を咲かせよ。

牧場におりる露のように

(答・聖歌隊) 地を潤す雨のように 王は来る。

民に平和をもたらすために、

(答・聖歌隊) 地を潤す雨のように 王は来る。

栄光は父と子と聖霊に。

(答・聖歌隊) 牧場におりる露のように 地を潤す雨のように 王は来る。

(聖歌隊) 天よ、露をしたたらせ、雲よ、正義を降らせよ。

19日 ・ **グレゴリオ聖歌「おお エッサイの切株」(聖歌隊)**

O Radix Jesse, qui stas in signum populorum, super quem continebunt reges os suum,

quem Gentes deprecabuntur: veni ad liberandum nos, jam noli tardare.

おお、民の旗印として立ったエッサイの切株、あなたによって諸国の王は鳴りをひそめ、

民はあなたに願ひ求める。時を早め、わたしたちを救いに来ててください。

20日 ・ **Fr. リスト編曲「アルカデルトのアヴェ・マリア」(オルガン)**

アヴェ、マリア、恵みに満ちた方、主はあなたとともにおられます。

あなたは女のうちに祝福され、ご胎内の御子イエスも祝福されています。

神の母聖マリア、わたしたち罪びとのために、今も、死を迎える時も、お祈りください。アーメン。

21 日 ・ A. ギルモン作曲「ヘンデル作『ユダス・マカベウス』のコーラル
『シオンの娘よ、喜べ』によるパラフレーズ」(オルガン)

シオンの娘よ。喜び歌え。イスラエルよ。喜び叫べ。 平和の王であるあなたの王が あなたのもとへ来る。

22 日 ・ グレゴリオ聖歌 「来てください、民の救い主」(聖歌隊)

1. Veni, redemptor gentium: ostende partum Virginis:

miretur omne saeculum: talis decet partus Deum.

2. Non ex virili semine, sed mystico spiramine

Verbum Dei factum caro Fructusque ventris floruit.

1. 来てください、民のすくい主 おとめからの出生を示して下さい

全ての時にある全ての世界は感嘆すべき このような誕生は神にふさわしい。

2. 男の種からではなく 神秘の息吹により

神のことは肉となり 胎内の実として咲く。

・ J. S. バッハ 「いざ来ませ、異邦人の救い主よ BWV 599」(パイプオルガン)

23 日 ・ 聖歌 「いま来たりませ」(聖歌隊)

1. いま来たりませ、救いの主イエス、 この世の罪を あがなうために。

2. きよき御国を 離れて降り、 人の姿で 御子は現われん。

3. みむねによりて おとめにやどり、 神の独り子 人となりたもう。

4. この世に生まれ、陰府にもくだり、 御父にいたる 道を拓く主。

5. まぶねまばゆく 照り輝きて、 暗きこの世に 光あふれぬ。

6. 御父と御子と 聖霊の主にて、 み栄え 今も とこしえまでも。

・ J. S. バッハ 「いざ来ませ、異邦人の救い主よ BWV 601」(パイプオルガン)

《そして 24 日》

聖書朗読 (ルカによる福音書 1 章 26 節～37 節)

・ **グレゴリオ聖歌「アヴェ・マリア」** (聖歌隊)

恵み溢れる聖マリア、主はあなたとともにおられます。

主はあなたを選び、祝福し、あなたの子イエスも祝福されました。

神の母聖マリア、罪深い私達の為に、今も、死を迎える時も祈って下さい。 アーメン。

聖書朗読 (ルカによる福音書 1 章 38 節)

・ **聖歌「エッサイの根より」** (聖歌隊)

1. エッサイの根より 生いいでたる、預言によりて 伝えられし ばらは咲きぬ。 静かに寒き 冬の夜に。

2. イザヤの告げし 小さなばら、きよきマリアは、母となりぬ。主の誓いの。み子は生まれぬ、救いのため。

3. 香りはたかし 小さなばら、きよきひかりは 闇を追いぬ。 まことの神の、 まことの人よ、救い主よ。

・ **C. ザットラー作曲「エッサイの根より(一輪の薔薇が咲いて)」** (オルガン)

聖書朗読 (ルカによる福音書 2 章 1 節～7 節)

・ **グレゴリオ聖歌「今日キリストがお生まれになった」** (聖歌隊)

・ **Cl. ダカン「ノエル」** (聖歌隊 & オルガン)

Hodie Christus natus est hodie Salvator apparuit:

hodie in terra canunt Angeli, laetantur Archangeli:

hodie exsultant justi, dicentes: Gloria in excelsis Deo, alleluja.

今日 キリストはお生まれになった 今日 救い主が現れた

今日 地には天使たちが歌い 大天使たちは喜ぶ

今日 まさしく喜びの声を上げて賛える いと高きところなる神に栄光あれ アレルヤ

聖書朗読 (ルカによる福音書 2 章 8 節～14 節)

・ **聖歌「あら野のはてに」** (ハンドベル)

・ **聖歌「あら野のはてに」** 一緒に歌いましょう！

1. あら野のはてに 夕日は落ちて、たえなるしらべ 天 (あめ) よりひびく。

(くり返し) グロリア インエクセルシス デオ グロリア インエクセルシス デオ

2. ひつじをまもる 野へのまきびと、 あめなるうたを よろこびきぬ。(くり返し) グロリア...

3. みうたをききて ひつじかいは、 まぶねにふせる み子をおがみぬ。(くり返し) グロリア...

4. 今日しも御子は うまれたまいぬ。 よろずの民よ、 いさみてうたえ。(くり返し) グロリア...

聖書朗読（ルカによる福音書 2 章 15 節、16 節）

・ 聖歌「まきびと」一緒に歌いましょう！

1. まきびとひつじを 見守るその夜、 はじめて天使は ノエルを伝えた
（くり返し） ノエル、ノエル、ノエル、ノエル、主イエスは生まれた。
2. 神の子主イエスは まずしい姿で この世に來られて まぶねに生まれた。（くり返し） ノエル...
3. われらもこよひは 歌声合わせて 平和をもたらす 主イエスをたたえよう。（くり返し） ノエル...

聖書朗読（ルカによる福音書 2 章 17 節～21 節）

・ 合唱 G. Fr. ヘンデル作曲「メサイア」より「ハレルヤ」(聖歌隊)

ハレルヤ！ 我らの主、全能の神は支配者となられた。
この世の国は、我らの主とそのキリストの王国となった。
主は世々限りなく君臨される。王の中の王、主の中の主。ハレルヤ！

平和を求める祈り

平和の源である神よ、
今なお激しい戦闘が続く多くの国々では、
平和を望む多くの人が犠牲となっています。
苦しむ人、虐げられている人を支えてくださるあなたに祈ります。
国々の指導者を正しく導き、
憎しみではなく愛を、争いではなくゆるしを、
分裂ではなく一致を求める心をお与えください。
住む家をなくし、恐怖と不安の中の生活を強いられている人々を力づけ、
心と体に安らぎをお与えください。
すべての人に、争いや暴力を避け、
平和を実現しようとする強い意志をお与えください。
いつくしみ深い神よ、この世界に聖霊を豊かに注ぎ、
敵対する人々の心から怒りの炎を消し去り、
絶望にあえぐ人々の心に希望の火をともしてください。
あなたが望まれる和解と平和が、一日も早く実現しますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

主の祈り

・ **グレゴリオ聖歌（聖歌隊）**

天におられるわたしたちの父よ、
 み名が聖とされますように。
 み国が来ますように。
 みこころが天に行われるとおり地にも行われますように。
 わたしたちの日ごとの糧を今日も お与えください。
 わたしたちの罪をおゆるしてください。わたしたちも人をゆるします。
 わたしたちを誘惑におちいらせず、
 悪からお救いください。アーメン。

《クリスマスを迎える心の準備》

・ **楽楽「もろびとごぞりて～来たれ友よ」（ハンドベル）**・ **聖歌「もろびとごぞりて」一緒に歌いましょう！**

1. もろびとごぞりて いざむかえよ 久しく待ちにし
 主は来ませり 主は来ませり 主は 来ませり
2. 悪魔の力を うちくだきて 捕虜（とりこ）を放つと
 主は来ませり 主は来ませり 主は 来ませり
3. この世の闇路を 照らしたもう 光の君なる
 主は来ませり 主は来ませり 主は 来ませり
4. 平和の君なる み子をむかえ われらの救いと
 ほめたたえよ ほめたたえよ ほめ ほめたたえよ

・ **聖歌「O Sanctissima」（聖歌隊）**

1. O sanctissima, o piissima, dulcis Virgo Maria!
 Mater amata, intemerata, ora, ora pro nobis.
 2. Tu solatium et refugium, Virgo Mater Maria.
 Quidquid optamus, per te speramus: ora, ora pro nobis.
1. おお、何と聖なる、おお、何と憐れみ深いか、優しきおとめマリアさま。
 愛される御母、汚れなき御母。私たちのために祈ってください。
2. 慰めて下さる方、庇護して下さる方、おとめであり母なるマリアさま。
 私たちの願いはあなたを通して（聞きいれられることを）待ち望みます。私たちのために祈ってください。

・ 聖歌「いざ歌え」一緒に歌いましょう！

1. いざ歌え、いざ祝え、このめぐみの時、 救い主 あらわれぬ、喜べ、主にある民よ。
2. いざ歌え、いざ祝え、このめぐみの時、 悪(あ)しき世は くだかれぬ、喜べ、主にある民よ。
3. いざ歌え、いざ祝え、このめぐみの時、 天使たちと 声合わせ、喜べ、主にある民よ。

・ 奏楽「しずけき真夜中」(ハンドベル)

・ 聖歌「しずけき真夜中」一緒に歌いましょう！

1. 静けき真夜中 貧しうまや 神のひとり子は み母の胸に 眠りたもう やすらかに
2. 静けき真夜中 星はひかり 羊飼いたちは うまやに急ぐ 空にひびく 天使の歌
3. 静けき真夜中 光さして 清らにほほえむ 救いのみ子を たたえ歌え みなともに

聖書朗読 ブルーノ・ダシオン (神言修道会司祭、南山高等・中学校校長)

パイプオルガン 吉田文

南山教会聖歌隊有志

名古屋グレゴリオ聖歌を歌う会

ハンドベル 名古屋女子大学音楽第4ゼミナール・音楽表現ゼミナール